

聖書：士師記 2：6～3：6

説教題：いっそう墮落して

日時：2013年11月10日

新しい町を旅行する時、私たちはどんな準備をするでしょうか。その旅を実りあるものにしよと思うなら、前もってその町について調べるといことをするでしょう。その町はどんな歴史を持っている町か、どんな伝統や特色ある文化が発達したところか、また見所はどこか、味わうべき美味しい料理は何か、・・・など。もちろん、予定外の出来事に遭遇したり、旅行ガイドには載っていない発見をすることも旅の醍醐味の一つですが、何の準備もせずに行き当たりばったり歩き回っただけでは、十分にその町を理解したり、堪能したりすることはできないでしょう。あるいは現地に着いた後、観光センターのようなところに足を運ぶことも良いでしょう。パンフレットや地域紹介ビデオを見て、どんな視点でこの町を見て回ったら良いか、持つべき視点を与えられることは大きな助けになるものです。まさに今日の箇所はそのような役割を果たすところです。これから士師記を読み進むに当たって、どんなことを心に留めておいたら良いのか、この書の要約がここにあります。これなしに士師記を読んで、そのメッセージを汲み取ることも可能かもしれませんが、観光に踏み出す前に観光案内所に立ち寄るごとく、私たちはここで持つべき視点を持って、これから先の部分を読んで行くことができるのです。

さて、ある時代をより良く知るために必要なことは、その時代を前の時代とのつながりで考えることでしょう。そのため、6～10節でもう一度、ヨシュアの時代のことが述べられています。ヨシュアは約束の地カナン入国を導いた指導者であり、彼のリーダーシップのもと、イスラエルはこの地を大枠で占領しました。しかし細かく見るなら、まだまだ取るべき地と追い払うべき先住民が残っていました。それゆえヨシュアは晩年、なお徹底して主に従い、この地を完全に征服するようにとイスラエルの民に命じました。そしてイスラエルは、ヨシュアが生きている間、またヨシュアが死んだ後も主がイスラエルに行なわれた大きなわざを見た長老たちが生きている間、主に仕えました。すなわちカナン入国を果たした第一世代の信仰者たちはそうしたのです。やがてヨシュアは死んで葬られ、時代は次の世代へと移ります。果たしてその時代のイスラエルはどうだったのでしょうか。続く11節から19節にいよいよその時代のことが描かれますが、ここには士師記を読み解くカギとなる四つの段階が示されています。

その第一段階は、11節から13節に記されているイスラエルの背教と偶像礼拝という段階です。イスラエル人は主を捨て、バアルとアシュタロテに仕えました。バアルはカナンの土地に豊穡をもたらすと考えられていた男性の神で、アシュタロテは多産、快楽、愛欲の女神です。このバアルとアシュタロテの愛の関係、特にその性的関係がこの土地に豊かな豊作と祝福をもたらすと考えられました。そしてこのような神話は、神殿娼婦や神殿男娼の温床となります。礼拝行為の一部として、聖なる売春、姦淫行為が実践され、それがバアルとアシュタロテの愛の関係を促し、地域に豊穡がもたらされると考えられました。この恐るべき不道徳な宗教にイスラエルは倣い始めてしまった。

10 節に「彼らは主を知らず、そのわざも知らなかった」とありますが、もちろん彼らは知識としては主を知っていました。しかし、聖書の「知る」という言葉は、人格的な知識を意味します。つまり当時のイスラエル人は、頭の知識としては主と主のわざを知っていても、主との生ける関係には生きていなかったのです。主と共に歩むことを大事なことは考えない生活をしていたのです。そういう霊的空白地帯に、悪魔の誘惑は容易に忍び込むことができたのです。その結果、彼らは主の命令に聴き従わず、先住民たちを自分勝手な判断で残しておきました。そして次第にカナン人たちがしていることに興味を持ち、偶像礼拝と不道德の歩みへ落ちて行ったのです。

第二段階は、異邦の民による圧迫です。14 節：「主の怒りがイスラエルに向かって燃え上がり、主は彼らを略奪者の手に渡して、彼らを略奪させた。主は回りの敵の手に彼らを売り渡した。それで、彼らはもはや、敵の前に立ち向かうことができなかつた。」何をやっても、どこに出て行っても、イスラエルには災いがもたらされます。これは 15 節にありますように、かねてから誓われて来た通りのことでした。

第三段階は、イスラエルのうめき、叫びです。15 節の最後に「彼らは非常に苦しんだ」とあります。18 節にも「彼らがうめいた」とあります。これは出エジプト記の最初を思い起こさせる言葉です。大いなる皮肉は、彼らはエジプトから救われ、乳と蜜が流れる約束の地にいるのに、ここでもうめき、苦しんでいる。どこにいても、主を捨て、主に従わないなら、私たちもその場所でうめき、叫ばなければならなくなる。

そして第四段階は 16 節から 18 節の、さばきつかさたちによる救助です。主は彼らを通してイスラエルを救われます。なぜ主はそのようにして下さったのでしょうか。それはイスラエルが悔い改めたからではありません。その理由は 18 節最後にあります。それは「主があわれまれた」からです。主はただご自身の一方的なあわれみによって救助者を送ってくださったのです。ここに私たちがよくよく思い巡らして考えるべき、驚くべき主のお姿があります。

ところがこれで終わりません。19 節：「しかし、さばきつかさが死ぬと、彼らはいつも逆戻りして、先祖たちよりも、いっそう墮落して、ほかの神々に従い、それに仕え、それを拝んだ。彼らはその行ないや、頑迷な生き方を捨てなかつた。」ここにあるのは、振り出しへの逆戻りです。せっかくさばきつかさによって救われたのに、士師がいなくなると、第一段階の背教と偶像礼拝へ戻って行く。このように士師記は、4 つの段階を繰り返す時代です。いや 19 節には「いっそう墮落して」という言葉があります。すなわち 2 回目の振り出しに戻る時には、以前よりもっと霊的に墮落していた。このことは 3 回目の振り出しに戻る時、4 回目の振り出しに逆戻りする時は、もっともっと悪い状態からスタートしたということです。言わば螺旋階段を下るがごとく、どんどん下に落ちて行くサイクルを繰り返したのです。そしてこの書を読む中で分かることは、士師たちでさえ例外ではないということです。次回以降、オテニエルからサムソンに至るまで 12 人の士師たちを見ますが、私たちは彼らの言動にも疑問を感じる事が多くなるでしょう。途中のギデオンにも、これはどうなんだろうかと思うところがありますし、最後の士師サムソンに至っては、こんなことで良いのか！と思われることがいくつも出てきます。確かに士師たちは主によって大切な働きをしますし、ヘブル書 11 章の信仰の勇者た

ちのリストで彼らの信仰が賞賛されていることを考慮すべきですが、その一方で彼らの生活にさえも、「いっそう墮落して」というこの時代の推移が反映されてもいるという点に、この時代の暗黒ぶりを私たちは見ていかなければならないのです。

こういうイスラエルに対する主の宣告が 20 節 21 節にあります。「それで、主の怒りがイスラエルに向かって燃え上がった。主は仰せられた。『この民は、わたしが彼らの先祖たちに命じたわたしの契約を破り、わたしの声に聞き従わなかったから、わたしもまた、ヨシュアが死んだとき残っていた国民を、彼らの前から一つも追い払わない。』」しかし続く 22 節には、驚くべき主の言葉が出てきます。特にそれは「試みるため」という言葉です。主が先住民たちを残したのは、彼らを試みるためというのです。3 章 1 節：「カナンでの戦いを少しも知らないすべてのイスラエルを試みるために、主が残しておかれた国民は次の通り。」4 節：「これは、主がモーセを通して先祖たちに命じた命令に、イスラエルが聞き従うかどうか、これらの者によってイスラエルを試み、そして知るためであった。」本来イスラエルは主との契約に不忠実でこの報いを受けたのですから、こうしてイスラエルは神に見捨てられた、カナンの地占領は夢に終わった、と聖書が締め括られてもおかしくありませんでした。しかし主はなお彼らを試みると言われる。すなわちこれは単なるさばきではなく、そこにはなお恵み深い主の目的があるということです。主はなおも彼らを試し、彼らが主によって救われた民であることを自ら証明する余地を、彼らに残して下さっている。

同じことが 3 章 2 節では「戦いを教え、知らせるため」と書かれています。イスラエルはこれまで戦いを通して、主を深く知って来ました。エジプトでの圧迫の中で、荒野における幾多の困難と戦いにおいて、またこの約束の地に入ってからのカナン占領の戦いにおいて、…。ここから教えられることは、クリスチャン生活とは戦いの生活であるということです。クリスチャンになれば、もめごとはなくなり、のんびり平和に生活できるのではないのです、主は私たちを戦いへと召されるのです。私たちは様々な困難や戦いの中で初めて、主に頼ることを具体的に学びます。主に頼らなくては祝福の道はないこと、自分には一切希望がなくとも、主は十分な恵みを持って下さることを学びます。そうしてその方により頼むところに私たちの動かぬ幸いがあるということを経験的に学ぶのです。

私たちがそれぞれ抱えている問題も、このような目的をもって、主のご支配のもとで与えられているということを私たちは考えてみたことがあるでしょうか。確かにそれは私の失敗、私の怠惰さがもたらしたものかもしれませんが。自業自得の苦しみかもしれませんが。しかしここから教えられることは、主はそこからも、私たちの益を取り出して下さることができるということです。私が今、ため息をつき、しかめっ面をせずにいられないような苦しい状況も、私たちが主により頼み、主の恵みと力によってそれらを乗り越えて行けることを経験的に学ぶための機会として主は与えて下さっている。そのような主のあわれみと、恵み深い目的を見上げて、私たちは主のお心に答える歩みへ立ち上がって行くべきではないでしょうか。

それにしても最後の 3 章 5 節 6 節は、またがっかりする内容です。イスラエル人はカナン人と交わり、結婚しました。これは厳しく禁じられていたことです。これによってイスラエル人はカナン人の宗教や風習にむしばまれてしまうことになるでしょう。いくら主はあわれみ深く

でも、こんなイスラエルではいつまでもつだらうか…と思わざるを得ません。しかし慰め深い事実は、士師記はまだ続いて行くということです。どこにも光がない暗黒イスラエルなのに、なおも主は導かれることを士師記は記して行きます。そのことを見ていく時、私たちの頭に思い浮かんでくるのは哀歌3章のみことば：「私たちが滅びうせなかったのは、主の恵みによる」。同じく頑なで罪深い私たちが、このように生かされているのは奇跡であり、ただ主のあわれみによる。これは、その上にあぐらをかくための真理ではありません。私たちはイスラエルをこのように取り扱って行かれる主の姿を見て、恐れおののきつつ、深い感謝と献身をもって主に近づくべきでしょう。

主は私たちを戦いへと召されます。たとえそれが自ら招いた困難でも、主はその状況をもってなお私たちの主への信仰を試そうとしておられます。その状況であなたは主に立ち返り、主に信頼し、主の力によってみことばに従う民であることをあかしする者であるだろうか。その御心を感謝し、一つ一つの解決を主に求めて、目の前の戦いからも益を取り出して下さる御手によりすがって前進する信仰者の歩みへと導かれたいと思います。